人体屋敷

白祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人体屋敷

【Ｎコード】
Ｎ４８７２Ｚ

【作者名】
白祈

【あらすじ】
数十年前、その別荘では様々な人体実験が行われていた。
非道としか言いようのないことをされた人々は、絶叫し、生々しい血に塗れ、別荘の周辺に住む人々を戦慄させていた。
だが、ある日を境にその声は聞こえなくなった。
多くの謎を残したまま、その別荘はとある人に買われる。

そこへ泊りにに来た四人の男女の結末とは…

暗い廊下は電気がつかない。（前書き）

山の奥深くの屋敷に泊りに行った四人それぞれの哀しく、別々の結末をどうぞ。
キャラの性別ですが、AとCは男、BとDは女です。
グロいかもしれません（、・｜・、）（。｜｜｜。）

暗い廊下は電気がつかない。

その日は、AとBとCとDで、楽しみにしていた日だった。しかし、長い間放置されていた別荘は、とても不気味な雰囲気を持っていた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

古びた扉は、ギィィィイイという音をたてて開いた。中は真っ暗で、電気のスイッチなど見つかる気がしない。仕方が無いので、懐中電灯を付け、Cは電気のスイッチを探し、押したが、明かりがつくことは無かった。

「おかしいな、前に来た時は、ついたんだが」

「あはは、C君が前に来た時って、子供の頃でしょ？それ以来来てないなら、つかないのも当然じゃない」

Cの独り言にBが答えた。

一歩、また一歩と歩を進める度に、床が軋み、頼りない音をたてる。外は雨が降っており、屋敷の中は少し肌寒かった。

「お、やったじゃんか、リビングは電気ついてるぜ？」

「本当だ！良かった、真っ暗じゃちょっと嫌だったからなー」

Dがくすくすと笑い始める。Aも笑う。その笑いが広がり、やや緊張気味だった雰囲は和んできた。

不意に、Cが思い出したように喋り始めた。

「君たち、この屋敷の噂話を知っているかい」

Bはきょとんとした顔で、次いで身を乗り出し、興味津々のいった様子で話しの続きを待った。

「ね、ねぇ…。私、怖いよ。Bちゃんは怖い話し平気かもしれないけど、私は駄目なの」

「もう、Dさんは怖がりねぇ！大丈夫よ、まだ怖い話しかもわかんないし」

「Dには悪ィけど、俺も話し気になるな」
「でしょー！？」
「じゃあ続けるとしようか。昔、僕らが生まれるずっと前。ここで、とある人体実験が行われていた。生身の人間の目玉をくり抜き、生きたまま牢獄へ閉じ込め、少しずつ毒虫を入れていったりした。それはもう、地獄としか言いようがないものだったそうだ。血まみれで、絶叫する大量の人々…。しかし、ある日突然、その声が途絶えた。近所の人々は皆、てっきり実験体が全員死んだのかと思い、次の実験体は誰になるかと、日々震えた。だが、もう実験が始まることはなかった」
「な、なんで？」
「それは……」
　Cはもったいぶって、沈黙した。そして再び口を開きかけた瞬間、軽快だがどこか外れた調子のメロディーが流れた。それは、Aの携帯の着信音だった。
「おっと、俺のメール……っ！？」
「どうしたの、A君」
「こ、このメール、見てくれよ」

【許さない、捕まえてやる。
　今更逃げられるとは思うなよ。
　まずはお前からだ、復讐してやる。
　安心しろ、
　俺たちみたいな死に方はさせない。
　もっともっともっと、痛ぶって、
　酷いことにしてやるよ】
『……！！！』
　四人は戦慄した。しかし、一番はやく立ち直ったのは、意外にもDだった。
「……逃げなきゃ！まだA君しか狙われてない、まだ私は助かる！

だから、だから言ったのに！あなたたちが勝手に！」
「待てよ、おい、D！一人は危険だ！」
　しかしDには誰の声も届かなかった。そのままリビングから懐中電灯も持たずに出て行ってしまった。
「おい、B。連れ戻してこいよ」
「い、嫌よ！C、あんたが行って！」
「仕方が無いな…」
　無言でCがドアノブに手をかけ、部屋から出ようとした。が、開かない。
「なんでだよ！？」
　Aは焦り、Cを突き飛ばし扉を叩く。しかし、開かない。
「おいおい、A？あまり騒ぐと、メールの送り主にバレるかもしれないぞ？」
　Cはにやにやと笑いを浮かべる。そして、もう一つの扉があるから、遠回りになってしまうがそこから行く、と告げた。
＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊
　そこは暗かった。リビング以外のほとんどの電気がつかないようだ。Cは幼少期に一度ここへ来たが、玄関に上がっただけですぐに帰ってしまったため、構造がどうなっているかはあまり知らない。しかし、無知、という訳では無かった。
　まずはここから裏口へと出なければならないが、その間に通る部屋が確か、たくさんあったはずだ。
　長い廊下を歩き抜け、ふっと寒気がして振り返る。だが当然、誰もいるはずがない。
　随分重い扉を開け、物置状態の部屋へ入る。懐中電灯で辺りを照らしてみる。
「……！？」
　そこには……
＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

暗い廊下は電気がつかない。（後書き）

読みたいとコメントをしてくれる方がいるなら続きを書こうかな……

申し訳ありません、中途半端な文章で終わってしまって……

リビングとメールと4人の行方（前書き）

今回も短いですが、Cの視点です。ホラーっぽくなっているでしょうか？多分なってませんね；；

リビングとメールと4人の行方

そこには、真っ暗なリビング……Cたちがさっきまでいたリビングだった。しかし、電気はついていない。AもBもいない。ソファは埃にまみれ、棚は倒れている。

「こ、ここは？」

人の気配はしない。その時だった。ドサッと音がし、足元に何かが転がってきた。懐中電灯を当てると、そこにあったのは…

「……A？」

Aの、死体。頭はかち割れ、足が片方ない。千切れた、という表現が正しいであろう足の断面。青白くなった肌はドス黒い血の色で見えないくらいだ。

Cは何が何だか分からなくなった。先ほどまで電気がついていたリビングは汚れ、Bはいない。Aは死体となってCの前に現れた。

進むしかない、とCは心の中で呟いた。戻れない可能性があっても、この別荘は、母さんが……。

軋む床を踏みしめ、懐中電灯で照らして、リビングの奥へと歩く。どこからか笑い声が聞こえた気がした。

リビングの扉に手をかける。Dが出て行った方の扉はやはり開かなかった。キィィィイイもいう耳障りな音をたてて扉は開く。

ーーーーー着信音。Cのポケットから、落ち着いた着信音が流れた。

【痛いんだ。目玉がなくなった。足が喰べられた。喉が渇いたから、近くにあった赤い水を飲んだ。あの水はなんだ？助けてくれよ、俺を置いていくのか？俺も連れていってくれよ。

おかしい

コワイ

苦しい

】

メールの送り主はなんと死んだはずのAだった。

「ここにいちゃいけない。おにいちゃん、にげて。つかまってしまう」

「誰だ？」

どこからか澄んだ少女の声が響いた。

「……だが、ここから出た方がいいのは本当のようだ」

何かの気配を感じ、　Cは開いたままの扉の向こうへ踏み出す。

ーー彼は気付いていなかったが、その後ろには笑っているAがいた。

リビングとメールと4人の行方（後書き）

さて、次は誰視点で書こうかな。決まっておりませんwでも当分はBが出てこないと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4872z/

人体屋敷

2011年12月29日10時52分発行